

2020年11月29日 礼拝説教要旨

詩編講解説教38「たとえ力尽きても」

詩編38：10～15、ローマ8：22～25

この詩人が置かれている状況はまことに厳しいものがあります。これは単に病の苦しみだけではありません。その病ゆえに人からも見捨てられ孤独になること。またそれゆえに誰かの心無い誹謗、中傷を受けています。そしてその根底には自らの罪を悔いる罪の苦しみがあります。そのように幾重にも苦しみが重なっているのです。ここには人間の力尽きた状態があります。

ここを読みながら思い出したことがあります。入院されたある教会員を訪問していた時のことです。わたしはせめて御言葉を届けたいという思いから説教の原稿を届けたり、また耳でも聞けるようにCDに録音した説教を届けました。初めは喜んでおられるように思ったのです。ところがある時、その方がこう言われた。「先生、ごめんなさい。もういいです」病室の天井を見つめながらそう言われた。その時は少しショックだったのですが、これはわたし自身大いに反省させられた出来事でした。経験上、皆さんもお分かりと思いますが、文章を読むことも、何かを聞くことも結構体力を使うのです。人は本当に弱っている時は、もう読むことも聞くこともできなくなります。皆さんも何か思い煩い、心配事がある時は、テレビを観たり音楽を聞いたりする気も起きないでしょう。音楽を聴いてリラックスできる程度の悩みはまだ本当に悩んでいないのです。本当に弱り切った状態というのは何もできない。自分から何かをする力はもはやなくなるのです。

病気を伏せている方、また年老いて体が弱り外に出られない方々はたくさんおられます。教会の中にもそういう友を何人も知っています。さぞかし寂しい思いをしているのではないか、退屈ではないか、気晴らしに外に連れ出してみたらどうか、教会に来ればいいのに。わたしたちはそう思うことがあります。それは元気な人の感じ方なのです。弱り切ってしまうともう自分から何かをする力がなくなる。気力も体力もなくなる。この詩人もそう状況です。「力を見捨て、目の光もまた、去りました」（11節）病に苦しみ、友も家族からも見放され、さらには容赦ない人からの悪口を受けていても、もはやその悪口を聞く力も反論する力もない。人間はそういう状況にまで陥るのです。

でも人間の限界を示して終わりならそこに希望はないでしょう。ではどこに救いがあるのでしょうか。かつて内村鑑三の影響を受けて無教会の指導者で関根正雄という人がおります。旧約聖書の学者でした。著作集がありまして詩編の注解も書いています。関根先生がこの38編について、この詩人は「自己の無力に徹し、神と自分の魂とのギリギリの対決にまで追いやられている」と書いております。そしてこのギリギリの状況で詩人は何を見るのか。この詩人は「わたしの主よ」と呼びかけています。力なくぼーっとしているのではない。神さまと向かい合っているのです。人間はそういうギリギリの状態の中でこそ真に神さまと出会い向かい合うことができるということです。そこに救いがあるのではないか。人間は力尽きたところで終わりではない。信仰者はそこでいよいよ深く神さまとの生きた交わりを経験するのです。

どうしてそのようなことが言えるのでしょうか。それはこの人間の限界、力尽きたところにイエス・キリストが来られたからです。今日からアドヴェントが始まります。この罪の世に神さまの独り子が来られた。ご自身がそれこそ弱い、無力さの象徴のような赤子の姿で生まれら

れた。人間の弱さの限界を担われるためです。そしてそれがいよいよ徹底されたのが十字架の死であります。今日読みましたこの状況はまさにキリストが十字架で経験された状況ではないでしょうか。12節に「避けて立ち」「遠く離れて立ち」とあります。弟子たちは十字架に架けられた主を避けて逃げて行きました。ルカ福音書では「イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って。これらのことを見ていた」(23:49)と書いて、十字架上の主イエスの孤独を描いています。また人々の侮辱、罵りもお受けになられます。けれども主イエスはそれに反論されることはありません。黙ってただその悪口をお受けになられたのです。「口は話せないかのように開こうとしません」(14節) イエス・キリストはここでまさに力尽き無力さの極みに徹しておられるのです。それはわたしたちが苦しみの果てに力尽きたところでお深くわたしたちと出会うためです。「わたしの主よ、わたしの願いはすべて御前にあり、嘆きもあなたには隠されていません」(10節) わたしたちの力尽きたところもすべてをご存知であられ、これを担われるために主は十字架におかかりになりました。

わたしに「もういいです」と言われた方がずっと病室の天井を見つめておられた姿が目に焼き付いています。もちろんわたしが訪ねると喜んで迎えてくださいましたし会話もありました。聖書を読み祈ると「アーメン」と応えられました。そういう方々を何人も見て来ました。もう聖書も読めない。説教も聞けない。でも彼らは決して退屈しているのではないのです。天井を見つめながら神さまと向かい合っている。力尽きたところでお神さまと深く出会うという体験をしています。

今も病床にある友が、高齢の友が一人孤独に力なく天井を見つめているでしょう。暗い部屋で一人過ごしている友がいることを覚えます。特に今はなかなか訪ねることもできず会えないもどかしさを覚えます。どんなに寂しい思いをしているか。そう考えて胸が締め付けられるような思いをしている人はたくさんおられます。でも彼らは決して孤独ではない。主が共におられる。これは気休めでも、都合よく解釈しているのでもありません。その力尽きたところでお深く出会ってくださるのです。そのために主はこの世にお生れになられ、この世のあらゆる患いを担われ、孤独を味わわれて十字架で死んでくださいました。そして三日目によみがえられて、わたしたちの魂を陰府から引き上げてくださった。「わたしの主よ」と呼びかけ祈ることができるようにしてくださいました。わたしたちがたとえ力尽きても、その魂は神さまと限りなく近くあることをわたしたちは信じます。